

檜垣泰彦 Yasuhiko Higaki

プログラミング言語 (選必)、2セメ、月3、受講登録数 39 名

プログラミング演習 (選必)、2セメ、月4、受講登録数 40 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

プログラミング言語とプログラミング演習はペアで履修することを推奨している。両方とも同じテキストを使用し、プログラミング言語の授業ではこのテキストに従って、1 回につき1章のペースで講義していく。これにより13回の授業でテキスト1冊すべてを扱っている。昨年度から中間試験を実施している。演習では同じテキストの演習問題を扱う。13回の演習で約100問のすべての演習問題に取り組みせる。授業・演習とも初回は導入で2回目から各章に取り組み、中間に教科書の演習を補う特別問題を設定した。プログラミング言語の授業では予めテキストを読んでおき、かつ指定の例題を実際にコンパイル・実行しておくよう指導している。プログラミング演習では、独自開発のプログラミング演習支援システムを利用して演習を実施している。このシステムを用いることで、受講者は授業時間以外でも自宅などから演習に取り組むことが可能となっている。授業時間内の演習だけでは不十分であり、このように十分な時間をかけて演習に取り組むことが重要であると考え。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

プログラミング演習についてアンケートを実施した。「授業内容の量を考慮すると、進度は適切でしたか？」の質問に対し、3.9 (平均は4.2) という結果が得られている。昨年度の3.6からは改善されたがまだ低い値である。「板書、OHP、スライドなどは見やすかったですか？」のスコアは4.1 (平均4.2) で昨年と同じ評価であった。「この授業をよく理解できましたか？」に対して3.3 (平均3.8)、「全体を通して、この授業に満足しましたか？」については3.9 (平均4.2) といずれも平均より低くなっている。プログラミング演習支援システムによる独自アンケートでは、「C言語の勉強を楽しく進められていますか？」に対して、第3回目の授業では最大4.0のスコアのうち、平均3.41、最終回では3.24であり、若干値は下がったものの高い値が維持できている。「演習支援システムは役立ちましたか？」については、第3回で3.49、最終回で3.64となっており、全体を通しての評価は高い。

3. 今後の授業改善について

C言語の場合、相互に関連している部分が多く、全体を見渡せる必要があるといえる。そのため、初級のテキストを一通りやる必要性は高いと考えている。消化不良になっている学生もみられるが、そのような学生にとっても全体を見渡したという経験は重要であると考え、今後も方針を継続予定である。

小倉 裕直 Hironao Ogura

エネルギー化学工学（選必）6セメ、木6、受講登録数21名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

エネルギー化学工学の授業概要は、資源・エネルギー問題および環境問題の観点から、環境エネルギー有効利用システム設計に必要な基礎および最新研究状況を講義した。特に、省エネルギーシステム設計に必要な化学技術基礎とその社会への適用を解説した。

このなかで、CO₂による地球温暖化問題、NO_x, SO_xによる酸性雨問題等の環境問題の多くは、直接的な物質によるものではなく、エネルギー利用によるものであることをまず理解してもらえようとした。そしてエネルギー有効利用の重要性を認識し、省エネルギー、エネルギー変換、エネルギーリサイクルに必要な物理化学、化学工学および環境工学の基礎を理解し、さらに次世代エネルギー有効利用技術によるエネルギーリサイクル有効利用社会について理解してもらえようとしてストーリー立てをした。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

エネルギー化学工学についてまとめる。これはAコースおよびBコースの学生を対象に、行った講義である。全ての評価についてほぼ4以上であり何とか努力の成果が出たと思われる。特に、「3 教員の声はよく聞こえましたか?」、「5 板書, OHP, スライドなどは、見やすかったですか?」、「9 例題, 例え話やサンプル等がわかりやすかったですか?」、「10 授業では宿題, レポート等が理解を助けるのに役立ちましたか?」、「16 全体を通して、この授業に満足しましたか?」等は評価が高く、実際の環境問題における処理工程では、各種計算の基礎として物理化学および化学工学の基礎概念で習得したものが大いに役に立つことを踏まえ、学問基礎と実例の関連を挙げながら説明したことが良かったと思われる。基礎概念は理解して式を使う、ことを目標として、複雑になりすぎる各種計算式の誘導などは避けた。多方面にわたる参考書からオリジナルのストーリーを作り、主にパワーポイントによる解説を行った。このような努力が学生の理解を高めることに役だったと判断する。

しかしながら、このような努力が裏目に出た部分もある。それは「13 あなたは毎回の授業の準備学習・復習に平均してどの程度の時間をかけましたか?」等は評価が低く、必要とされる物理化学および化学工学の基礎概念を全てこなそうとして要点等を供給しすぎ、理解を深めさせるべく課題提供等に多くの時間を割けなかった点である。またエネルギーシステムの実例等もなるべく多く見せようとして、演習等の時間が足りなかったと考えられる。

なお、14 あなたはこの授業で質問をしましたか?について、低い点数となっているが、実際には、授業後半でのプレゼン演習にて全員から質問してもらっている。

3. 今後の授業改善について

アンケート結果における理解しにくいと感じられている点を、まずは改善したい。物理化学、化学工学の基礎分野は復習的に行い、応用的な部分を中心に適切な進度にしたい。また、パワーポイントによる表現を多用し学生がノートをとる時間が十分ではなかったことにも起因しているので、パワーポイント資料の配布等も併用したが、内容自体も削減する。さらに授業の理解を深めるために、宿題、中間レポート等も今後も多めに活用したい。

大坪 泰文 Yasufumi Otsubo

都市環境情報演習 I (選必)、5 セメ、木 4、5、受講登録数 28 名

都市環境情報演習 I (社会人) (選必)、5 セメ、土 3、4、受講登録数 4 名

都市環境情報演習 II (選必)、6 セメ、木 4、5、受講登録数 18 名

環境リサイクル化学 (選必)、5 セメ、木 6、受講登録数 21 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

「環境リサイクル化学」についてまとめる。この科目は昨年度のカリキュラム改変によりこれまでの「環境材料化学」から科目名を変更したものである。これまでは、地球環境、リサイクル、廃棄物処理など資源循環に関する現在の問題点の本質を把握し、化学としてその解決法を理解することを目的としてきたが、過去の受講生からの要望により、旧科目の内容に加えてその具体的手法という観点から化学工学的単位操作についても触れることにした。より定量的 (数学的) 理解を深めるように改善して 2 年目になる。基本的には、最初に問題があり、それを実践により解決するために必要な化学は何かという構成となっている。実際の環境問題を解決するためには、事実の認識が重要であり、そのため講義ではパワーポイントを使って様々なデータを紹介しているが、現状では、このような視点からの適当な参考書がないため、毎回、講義内容をまとめた資料を配布している。この講義は夜間に行っているものであり、社会人学生も多く、遅刻や欠席も多い。遅刻や欠席した授業については後で調べたり、復習できるように配慮しているつもりである。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

アンケート結果では、学生自身の問題に関わる項目以外は、概ね学科の平均程度であったが、評点が低かった項目に「宿題、レポート」があり、3.4 であった。受講者の中には社会人が多く、仕事などの都合で期限を守れない学生が多数出てくると考えられたので、講義の理解を深めるための課題としていくつか上げたが、あえて提出を求めなかったことによるものと考えられる。教員としてアンケート項目の中で最も関心があるのは、「授業の理解度」と「満足度」であり、それらの評点はそれぞれ 3.2 と 3.9 であった。一昨年度および昨年度におけるそれぞれの評点は 3.7、3.6 および 4.5、4.1 であるので、次第に低くなっていると判断できる。これは昨年度から講義内容に含めた化学工学に関する部分と推察される。講義中、数式に対して興味を持っていないという表情の受講生が多く見られたことから、数学的基礎知識が不足していると感じられた。そのため、数学が重要な役割を演じている化学工学について理解することが不十分であったものと考えられる。これは試験の結果にも現れており、数学的記述を求める課題の解答率がかなり低かった。さらに、これまでも期末試験で 60 点に満たない受講生については追試験で単位取得の機会を与えてきた。しかし、今年度はこれに該当する受講生はいたが、どれも追試験の受けなかったという状況であった。途中であきらめてしまったようであるが、これは学習意欲を喚起させる講義という観点からは反省すべき点と考える。

3. 今後の授業改善について

受講生の数学および化学に関する基礎知識がどの程度であるかを把握し、それに合わせて講義内容を調整することが重要と感じた。まずは一回目の授業で受講生の学力を見るため無記名で試験を行い、それに基づいて 1 回の講義を基礎科目の復習に当てるつもりである。また、他の科目に関する授業評価アンケート集計を見ると、宿題やレポートが理解を深めるのに役立っているように評価できるので、毎回ではないにしても宿題を課すことを考えている。

山崎 文雄 Fumio Yamazaki

都市環境システム学科・都市基盤工学領域・教授

信頼性工学（選必）4セメ，火6，受講登録数30名

防災工学（選必）6セメ，月4，受講登録数39名

防災工学（選必，社会人クラス）6セメ，月7，受講登録数8名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

担当している3科目は、いずれも「講義ノートはPDFで事前にインターネットで公開し、学生が自分でこれを印刷して持参する。講義時には、パワーポイントで講義し、重要な数式などは事前講義ノートでは空白にしておき、講義時間に自分で書き込む穴埋め方式」をとっている。以前はこれをOHPでやっていたが、講義資料のコピーの手間や資料の見やすさ、さらに欠席した学生でも講義内容をだいたい把握できることを考えてこの方式を取っている。とくに信頼性工学は難しい数式が多数出てくるので、全部を板書することは、学生、教員ともに大変な苦痛で、学生の興味をそぐことになると認識している。昨年度から新たに開講した防災工学では、最新の研究成果などを盛り込んだ講義ノートを作成し、受講者に防災に興味を持ってもらえるよう努力している。とくに今回は2011年東日本大震災があったため、その内容も取り入れるようにした。

もう1つの工夫は試験である。試験は中間と期末の2回行っているが、信頼性工学では、2回ともA4用紙で1枚（裏表）のメモを持参してよいこととしている。これは、難しい数式を丸暗記することは困難だし、意味もないと考えたからである。それよりも、「半持ち込み可」方式とすることで、このメモを作成するのに学生がよく勉強するからである。パワーポイントの資料は全部で100ページを超えるので、重要と考えられるところを要約することにより、勉強になるのである。また、正規分布表を使った計算問題も加えて、実践力をつけるように工夫している。

防災工学では、難しい数式などが殆どないために、2回の試験は持ち込み不可とし、重要な点を理解しているかを問う問題とした。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

今回は、防災工学について述べる。アンケート結果について、重要と思われる設問に関する平均値を見てみる。Q2の「教材は授業の理解に役立ちましたか？」については、4.8(一般クラス)、4.8(社会人クラス)で、4.4(学科平均値)と比較して高めの評価を受けた。苦勞して作成した講義ノートが評価されたものと思う。Q15の「この授業内容を理解できましたか？」については、一般クラスで3.9、社会人クラスでは4.3であり3.8(学科平均値)と比較してやや高い結果となった。Q16の「全体を通してこの授業に満足しましたか」については、4.4(一般クラス)、5.0(社会人クラス)で、4.2(学科平均値)と比較して、これもやや高めの評価を受けた。今年度は、受講生は少ないものの7限目に行っている社会人クラスから評価を受けたのは、苦勞が報われた気がする。

3. 今後の授業改善について

当面、授業のやり方は今の方式を継続するつもりである。パワーポイントの内容は、少しずつ改良を加えている。試験をやってみると以外にできない学生もいるので、例題の解き方などももう少し加えた方がいいかもしれない。

宮脇 勝 Masaru Miyawaki

景観計画（選必）、5セメ、水3、受講登録数 50名

景観計画（選必）、5セメ、木7、受講登録数 19名

都市空間工学演習2（選必）、5セメ、木3-4、受講登録数 24名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

景観計画では、デザインに関わる内容であるため、具体的な事例説明は写真や図を見ながら理解をすることが重要であると考えている。言葉だけでは伝えられない部分が多いため、画像を見ながら考えることが欠かせない。また、演習については、具体的なデザインの検討について、非常勤講師とともに個別面談で指導を行っている。都市のデザインにおいて、プロジェクトの現状や計画案は、図面から学び、図面を作成することがほとんどである。このため、一般に雑誌などではわからないような、計画段階の配慮事項や行政の具体的な仕事の内容を解説しているのが特徴である。また、そうした事例を、国内だけでなく、海外の先進的な事例をまじえて、理解していくことに配慮している。

ただし、実際の取り組みは、様々な都市環境に応じてその整備方針が大きく異なる複雑なものであるため、講義形式の「景観計画」では、都市のタイプ別に回を分けて事例に基づいて解説している。しかしながら、過去の授業評価アンケートの結果で、十分な理解度を得られていない傾向も見られたため、これに対処するために、今年度は授業内容の構成やボリュームを大きく変更した。

具体的に、最初の三回分は、ガイダンスの延長とし、難しい内容ではなく、「水」、「食」をテーマに、人々の取り組みやビジョンを中心として、学生の学習意欲が高まるように特段の配慮をした。また、学生の理解度を重視して、授業で取り上げる事例を従来より削減し、一事例の解説時間を増やした。さらに、海外の事例をまとめて取り上げる回を一回分新設し、学部生においてこれまで解説してこなかった海外情報を取り上げることで、少しでも国際的な意識も持ってもらう様に改変した。

そして、大きな変更として、各回に小レポートをまとめてもらう時間を配分した。これは授業の予習復習時間がほとんど取られていないアンケート結果を少しでも改善するために考慮した方法で、授業時間内に復習することを課した。これによって、各学生の理解度も増加すると考えた対処である。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

上記の改変によって、もっとも重視していた学生の理解度について、平均値が大幅に改善した。それまで同じ授業形式だったのにも関わらず、理解度が減少傾向にあったことは、危機感をもって対処することに教員を向かわせた。これは学生の学習意識の変化も背景にあることが推測された。これに対処するため、授業の興味を抱きやすいように、比較的簡単な内容や直感的に理解できる内容から授業内容を構成し直し、徐々に難しい内容に触れる構成とし、さらに、各回の小レポートの作成によって、自ら理解しているのかどうか自己チェックすることで、各回の授業内容が理解できているかを確認してもらう方法に切り替えたことが、授業評価結果の改善に働いたものとする。当然ながら、その他の評価項目も連動して、改善している。レポートの採点作業が増えた分教員にとっては大変であるが、理解度や成績の平均が向上につながることから、来年も継続する。

3. 今後の授業改善について

演習と講義の授業との連携が十分意識されていないものとして、課題が残っている。講義内容の改変だけではなく、演習の進め方の中でも講義が意識されるように、学生の意識改変を図りたい。

近藤 吾郎 Gorou Kondou

構造力学2 (選必)、4セメ、月1、受講登録数40名

構造力学2 (選必)、6セメ、月7、受講登録数8名

環境構成材料 (選必)、5セメ、水6、受講登録数50名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

構造力学2の科目は、朝と編入学生用の夜に同内容で実施している。この科目では、内容が毎回掘り下げていくものになるので、前回までの内容を理解して講義に臨むことが特に重要と考えている。また、回によっては授業内容を講義時間内に理解することがあるため、参考書の紹介や講義内容のプリントを配布するなど復習しやすくなるよう心がけている。また、理解程度を確認させるため、レポート提出を求めるなど復習を促している。また、朝の授業は演習科目が用意されているが、用意されていない夜の受講者のためなるべく授業内で演習問題を用いて、抽象的な理論を具体的にどのように応用するかを示すよう心がけている。

環境構成材料の科目は、材料実験の科目をともに、構造物の力学特性を理解するために、その理論を講義して、実験によりその理論の確認を行うものとなっている。都市環境システム学科の都市空間工学コースの学生にとっては必修科目となっているが、そのほかの学生も多くが受講している。そのため、構造力学を修得した学生と未修得の編入学生が混在した状態であるので、なるべく構造力学の知識は使わずに理解できる内容としている。実験においては、時間やスペースの制約から実験の観察が全員には十分できなかったこともあり、実験で観察すべき重要な事象を予めビデオ撮影した教材を実験前の講義で紹介して、実験前の予備知識を与えている。授業では、抽象的な理論の理解よりも、実験で観察される事象を直感的(感覚的)に理解できるように心がけ、スライドを用いて行っている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

14項目に及ぶ5段階評価で、構造力学2の科目は概ね平均的であるが、設問15や16が平均より低い結果となっている。アンケートは朝と夜の科目の合計で表されているので明確ではないが、朝の授業は月曜1限ということが理由なのか極めて遅刻者が多く、課したレポートの内容についても真面目に取り組んでいないと思われるものが少なからずある。また、自宅学習の時間もそれほど多くないようである。復習を促す試みはあまり機能していないようである。夜の授業では、社会人の学生が多く高度な理論の理解に不安があったが、出席状況や授業最後に設けている質問時間も活発であり、提出されたレポートからも復習を行っていることが伺え、成績も良好であった。

環境構成材料は内容的には高度なところが少ないため、自宅での学習時間は少ない割に理解度は高く、満足度も高い結果となっている。

3. 今後の授業改善について

授業評価結果から、構造力学2については、授業中に理解できるよう内容を吟味する必要があるかもしれない。しかし、自分で理解度をチェックし、不足している場合には復習ができるような取り組みを新たに考えたい。

荒井 幸代 Sachiyo Arai

都市情報工学教育研究領域 都市情報システム分野 准教授

情報工学基礎 (必)	4 セメ, 水 3,7	受講登録数	38 名, 14 名
都市環境基礎演習 II	4 セメ, 木 3,4	受講登録数	62 名
都市環境情報演習 I	5 セメ, 木 4,5	受講登録数	28 名

1. 授業構成法: <その目論見と帰結>

この 1, 2 年, 私と学生さんの間に **Generation Gap** を感じる. そこで, 授業構成法を考えた. この **Gap** を埋めるために挑発的な講義をすることである.

「当該科目を習得しないと世の中から取り残される」程度のことを主張する. この主張は満更はずしてはいない. 学生さんが嬉しいかどうかは別として, 客観的に見て, 「社会にとって嬉しい要素技術であること」を理解してもらうことに 15 週費やしている. 以下は 2010 年の文章と同じである. 去年読んだ人は読まなくてよい. そうそう授業構成法は変えていられない. 3 年見て駄目だったら変えるかもしれないが, しばらくこれでやるつもりである.

最近の学生さんは, “これが何に役に立つのか?” と必ず聞いてくる. (社会問題に少し踏み込んで, 若干の創造力があれば, 色々とみえてくるのではないだろうか?)

如何せん, 本講義は数理的基礎であるため, 直接の貢献は見えにくい “知らないで人生半分損をする位” の勢いでまずは (おそろおそろ) 進めてみる.

役に立つ見込みは, 他の基礎的要素技術 (基礎理論) との組合せ次第である. もっと開き直れば, 「役に立つかどうかわからなくても身につけておく」くらいのキャパシティが欲しい.

だから, 他の基礎理論も習得する必要性もついでに強調しておくのが, 私の授業の習いである. 以上, まずは当該講義の貢献を伝えることからはじめ, これが 8 割を占める. 中身の理解については残りの 2 割, 目的と意義が伝われば理解も深まる.あとは独習を十分にしたい.

つぎに, テクニカル用語を確実に記憶させることを重視する. 用語とその用途さえ記憶に残して **Indexing** してくれれば, それぞれの詳細は必要に応じて教科書なり参考文献,あるいはインターネットで補充することができる.

つまり, 私の役割は, 学生諸君が後に「効率よく知識の検索ができるようなインデックス」を付加する手助けをすることと考えている. 中学, 高校と学んできた知識と関連付けられるよう, また, 最新技術に対して当該科目がどういった位置づけなのかを, 整然と組み立てる手助けとなるように毎年毎年, 講義名は変わらずとも, 板書き, スライド, 説明の内容は **Update** している.

2. 学生による授業評価結果, ならびにそれに対するコメント

自分が学生だった頃, 本に書いてない話をする先生が好きであった. 読めばわかることを説明してもらう必要はないと思っていた. しかし, 現在はあろうことか「教科書に沿ってやってくれない」というバカげた感想があったりする. これが上記述べた **generation gap** である. 学生に迎合する講義はやるつもりはないが, 理解や興味を促すインタラクティブなやり取りの展開が見込める講義が目標である.

3. 今後の授業改善について

講義スタイルの基本は変えるつもりはない. ただし, 内容は時代に合わせて毎年 **Update** する. 動画の導入が容易になってきたため, 理解を深めるための補助として利用する予定である.

情報工学基礎: Information Theory

(専必), 4セメ, 水 3, 7 受講登録数 38名, 14名

荒井幸代 都市情報工学教育研究領域 都市情報システム分野 准教授

1. 授業の組み立て方と取り組み方

今年度, 新カリキュラムの下で, 情報理論の読替科目として用意された講義である. 当学科で必要な情報に関する工学的基礎として, 通信理論と統計的分類学習から構成した. 半期でこの2つの総てを網羅することは困難である. したがって, 本講義では「情報の数量化」に関する手法として情報理論を位置付け, 統計的学習ではパターン認識に必要な「情報の分類」に焦点をあてた.

講義の最大の目標は, 情報の数量化と分類が, なぜ必要なのかを認識してもらうことである. これに付随して基礎数学である確率, 確率モデル, 線形代数が運用できるレベルになるまで例題や実例を用いた説明を心がけた.

2. 学生による授業評価結果, ならびにそれに対するコメント

14項目のうち, 「理解したと思う」と「スライドがみにくい」という2つの項目において若干評価(4ポイント前半)が低く, 他は満足という回答結果である. スライドに関しては意見を参考にしながら改善していきたい. また, 私側からのコメントとして, スライドがみにくい, という回答は後方に陣取る学生に多くみられ, 「もっと前へどうぞ」と申し上げたい.

一方, 「理解できたと思う」が低いことについては, 数学を用いること自体に拒否反応を示す傾向がみられ, 試験も持ち込み不可としていることもあって, 基礎的な知識の欠如を自覚する機会に触れたためか? しかし, 理解度の高い学生においても同様の傾向があるため, “難しい”という印象を与えないように教える努力が必要と受け止めている.

一昨年, 昨年に比べ, 授業での学生からの質問回数が減少している. こちらから指名することも多いが, これまでは学生側から自然に質問が出る雰囲気であったはずが, 今年は一方向的な印象であった. 学生の気質の変化もあるが, 原因の一つにスライドの完成度が高くなった(スライドの誤りが減ってきた)こともあるかもしれない. 多少の板書の誤りは, 学生の集中力や注意力を喚起し, 教員に指摘することで自信につながる, などの利点もあるかもしれない, などと考えている.

3. 今後の授業改善について

学生の反応をみながら試行錯誤で進めている状態である. 学生の傾向として専門科目に必要な数学はやってきているはずなのに, 道具として使えないことである. 中学, 高校で学んだことを知識として運用可能なレベルにするためにはどうしたらよいか? を常に考えながら講義に臨むものの近視眼的な(たとえば単位だけが欲しい)モチベーションしか持ち合わせない学生相手ではなかなか, こちらの努力も伝わらない. 一方, 基礎的なことばかりに終始すれば, 非常にレベルの高いモチベーションと意欲のある学生(千葉大学にこちらの方が多ければ)には不満な内容となってしまうことがある. このあたりのバランスをどうするかに関しても今後, 配慮すべき重大な課題である.

半期で教えられる範囲は限られており, 教員-学生双方に負担にならないよう, 必要十分な内容を盛り込むにはどうするのかに関しては, カリキュラムレベルで改善する必要があるかと思われる.

小林 秀樹 Hideki Kobayashi

建築計画 (A コース・選) 5セメ、金6、56名

都市空間工学演習Ⅱ (A コース・選必) 6セメ、木4・5、27名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

建築計画は、建築計画学の基礎知識に加えて、最新の計画事例を交えながら講義することで、学生の関心を高めるように工夫している。今年度は、東日本大震災があり、復興計画において住環境計画分野の取り組みが求められたため、授業内容を更新する時間が乏しかったが、災害調査の最新成果を加える等の工夫を行った。

図や写真を多用するため主にパワーポイントを用い、また即日課題を設けて理解を深めるようにしている。成績は、講義終了時に次々週を締め切りとして出題する6回の小レポートにより採点しており、学生からはレポート数が多いので大変だが、講義内容の復習にもなり大変有意義であるとの評価を得ている。

都市空間工学演習Ⅱは、複数教官による都市デザインの演習である。前半で対象地域の都市計画的な解析を行い、後半でプロジェクト提案を行うものである。本演習の特徴は、実社会で一般的なグループ作業を行うこと、および、グループ内で建築設計者・事業企画者・構造設計者の立場を仮想してロールプレイを行うことにある。このロールプレイに対応して、建築設計と構造設計の実務家に非常勤をお願いし、私と連携して演習を行っている。このような試みは、全国的にも先進的であり、当学科の特色となっている。

以上の他、普遍コアEで約200人を対象に「環境問題と住まい街づくり」を担当しているが、これについても画像を多く用いて分かりやすい講義に努めている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

諸事情から今年度の授業評価アンケートは省略したため学生の評価は不明である。

しかし、講義時の学生の様子からは例年通りの手応えがあり、高い評価を維持していると推測している。また、都市空間工学演習Ⅱは、少人数グループ分けによる極めて密度の濃い計画演習授業であり、成果発表会後の打ち上げなどで直接学生の声を聞くように務めている。本演習は、学生時代に最も集中して取り組む授業の一つであり、充実感に満たされる学生が多いが、その一方で消化不良をおこす学生もいる。不満足の原因の多くは、グループ作業に起因するもので、互いの協議の失敗や、作業量のばらつきに対する不満である。これについては、「本演習は実社会の縮図として行っている。街づくりの分野では、ほとんどの仕事をチームで行う。チームをうまく運営すること自体が必須能力である。」と、チーム力を磨くことが本演習の目的であると説明し、学生の自覚を促している。

3. 今後の授業改善について

現状維持でよいと考えている。しかし、評価の現状維持のためには、毎年新しい講義内容を加えることが必要であると認識しており、引き続き努力していきたい。

木村 諭史 Satoshi Kimura

環境ビジネス (選択必修)、6セメ、水3、受講登録数 25 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

担当した環境ビジネスは多岐のテーマにわたる日進月歩の分野であるため、学生が自ら環境ビジネスを構築できるように取り組んだ。社会人教員としての自分の強みと合わせて、『環境ビジネス起業塾』『持続可能な社会づくりのためのビジネススキーム』という観点で捉え、持続可能社会にむけた工学の役割・社会情勢・最新事例・経営手法を織り交ぜた。授業の中心はマインドマップやフレームワークを含めたブレインストーミング・情報整理・思考の可視化を取り入れた独自の実践的講義とした。講義はおもにテーブルに分かれたワークショップを中心とし、通常の2コマ連続講義では演習やグループワークを半分程度行った。また、環境ビジネスを長期的に構築できるように2コマ講義×2回のグループワークショップを2セット実施し、発表を織り交ぜた。

教材は特定のテキストに依存せず、複数の書籍、新聞の電子版、ニュースサイト、ウェブサイトなど多岐に活用し、毎回20枚前後のスライドに各種参考資料や事例を織り交ぜて紹介した。期末試験は環境ビジネスの個人プレゼンテーションの場とした。

2年目の授業であるため、初年度の反省点・改善提案を活かし、テキストも半分近く修正を加えている。とくにワークショップ中心となったため、学生アンケート結果からチームビルディングを踏まえたグループづくりや、ランダムなグループ、テーマごとのグループなど状況に応じて変化させた。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

授業内容については昨年同様、かなりの高評価がいただけた。点数が低かったのはQ13:準備・復習時間の1.6点(昨年2.1点)であるが、そもそも一回の講義内で完結することが多いので重視はしなかった。それよりも学生との双方向型授業を重視しておりQ14:質問の過多が2.8点⇒3.4点と増加した。これは授業前後の雰囲気づくり、学生の現状・習熟度に合わせた話題の振り方を意識した結果でもあると認識している。学生からは、『グループワーク、演習で主体性を持って関わられた』という意見が多く寄せられた反面、『グループワークがフランクすぎた』という意見にあるように、『ごまかせる』部分も生まれてしまった反省もある。また、『エネルギーなどの特に第三領域の分野をより詳しくするか、無くすかして欲しい』との要望があった。これは本講義が学生の学習範囲がつかみ切れていないため、技術各論などの具体的な部分をどこまで盛り込むかの調整が取れていないことである。

教員の目線からは、学生は授業時間中にグループ内で、より多くアイデアを出す・フレームに沿って緻密に計画する、などのアウトプットが想定したより少なかった。一方で発表の予習などは各自で時間を取っていたようであるため、なるべく個人で持ち帰ってじっくりと考えられる課題を考える。

3. 今後の授業改善について

地球環境・ビジネススキームを含んだ『ソーシャルイノベーション』的授業にシフトし、学生の所属領域ごとに専門が異なる中途半端な技術各論よりも、持続可能な社会像やそれに対する技術・環境ビジネスのスキームを追求することとする。授業に関しては、実際の事業計画書を手本に再構築する、中間発表大会を行うなどの具体性・持ち帰りの課題を増やした改善をする予定である。

丸山 喜久 Yoshihisa Maruyama

国土・交通計画（選必）、5セメ、金5、受講登録数 57 名

防災工学（選必）、6セメ、月4、受講登録数 46 名

防災工学（選必）、6セメ、月7、受講登録数 10 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

担当している3科目とも、パワーポイントを用いて講義を行っている。講義ノートは担当教員のホームページに掲載しており、受講者は印刷して持参することを推奨している。また、重要箇所は空欄としており、講義中に受講者がメモをとるように工夫している。単純にパワーポイントのスライドを配布すると、受講者は講義中に手を動かすことがないので、理解度を深めることと講義中に寝てしまうことを防止する目的で、上記のような講義の進め方をしている。

「国土・交通計画」は、交通需要予測、費用便益分析などの交通計画（ソフト）に関する事項と、道路交通流理論、交通環境と安全性などの交通工学（ハード）に関する事項を理解し、都市と交通の関係を説明できるようになることを目標とし、都市計画、土地利用との関係を十分に踏まえ、国土計画をベースに交通計画・交通工学の基礎的事項について解説している。「防災工学」は、セメスターの後半を担当しており、地震記録の解析法、地盤震動、防災都市計画などについて最新の知見を盛り込みつつ解説している。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

「国土・交通計画」に関しては、問2、問3の評価が高く（4.8、5.0）、ホームページに公開している穴埋め式の講義ノートと教員の声の大きさについては、概ね満足されたものと考えられる。一方で、問5の評価が少し低い（4.2）ので、スライドの見やすさについては今後検討する必要がある。また問10の評価が少し低い（4.3）のは、本講義では宿題を出していないので、仕方がないものと考えられるが、それに伴って講義の予習、復習に関する項目の評価も低くなっているため、今後は課題を提示して学生の理解度をより高める工夫も必要と考えられる。

「防災工学」については、2名の教員が分担しているため私のみに対する評価ではないが、国土・交通計画と同様に穴埋め式の講義ノートは概ね好評であると思われる。また、この講義でも課題を提示していないので、この点も今後の検討課題である。

3. 今後の授業改善について

本講義は一定の評価を得ていると考えているが、学生の理解度をより高めるために、課題を提示することなどを検討する。

塩田 茂雄 Shigeo Shioda

通信工学概論 I (選必)、5セメ、月3、受講登録数 44 名

通信工学概論 I (選必)、5セメ、水7、受講登録数 11 名

医用情報ネットワーク (選必)、5セメ、火4、受講登録数 48 名

都市環境情報演習 I (選必)、5セメ、木4・5、受講登録数 28 名

システム性能評価 (選必)、4セメ、月3、受講登録数 36 名

システム性能評価 (選必)、4セメ、木6、受講登録数 7 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

震災の影響により、前期の授業スケジュールが全体的に前倒しとなった点を除き、基本的には昨年度と同様の授業形態を採用した。いずれの講義でも、パワーポイントで作成した講義ノートインターネット上で学生に事前に公開した。授業では、パワーポイントをスクリーンに映し、解説する。学生は、講義ノートを持参すれば、ほとんど板書の必要がなく授業に集中できる。講義ノートを公開するのは、社会人学生に対する配慮からでもある。

パワーポイントによる授業は、単調になりやすく、また学生が受身になりがちである。そのため、以下のような工夫を行っている。まず、90分授業で用いるパワーポイントの枚数が25枚程度に収まるよう、講義内容を厳選する。代わりに、1枚3分ほどかけてじっくり説明する。パワーポイントには要点を記載するにとどめ、細かな点はその都度、板書し、学生がメモをとる機会を与える。板書の際は、部屋を明るくする。講義ノートをスクリーンに投射している間は電灯を消しているため、部屋が明るい時間と暗くする時間を交互にとり、学生の気分転換を図る意味もある。またパワーポイントにはアニメーションをとり入れて、わかりやすいスライドになるよう心がけている。

システム性能評価においては、学生に能動的に考える機会を与えるため、演習の時間を設けた。学生が演習に取り組む際のモチベーションを与えるため、演習の成績が良い場合、最終試験の結果に加点すると宣言して取り組ませた。通信工学概論 I でも演習の時間を設ける予定であったが、今年度は震災の関係で授業スケジュールが昨年度よりもタイトであったため、演習の時間はカットした。来年度は復活させたい。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

今年度は通信工学概論についてのみ授業評価アンケートを実施した。評価値は概ね昨年度なみであったが、理解度と満足度が大幅に低下(理解度: 3.9→3.4、満足度: 4.4→3.9)した。講義内容は変更していないため低下の原因は不明であるが、来年度以降注視していきたい。なお、「システム性能評価」の夜間開講は受講学生数が大変少なく、原因を調べたところ同じ時間帯に必修科目が開講されていることが判明したため、来年度は開講時限を変更する(6限→7限)予定である。

3. 今後の授業改善について

通信工学概論は、理解度と満足度が低下したことを受けて、わかりやすさを優先する方向で内容を少し変更する。他の講義は授業評価アンケートの結果を見ながら、適宜、改善していく。

木村 博則 Hironori Kimura

都市環境システム講座・環境分野・非常勤講師 (T1E069101)

環境工学II (選必)、3セメ、金6、受講登録数 48 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

環境工学IIは、都市環境システム学科に在籍する環境問題に関心のある、又は将来において建築士となることを目指している受講者の、環境工学に係わる広範囲の知識を知る機会となっている。従って、各々の専門的な知識、幅広い分野の都市環境に係わる、あるいは地球環境に係わる、具体的な課題解決のための身近な事例紹介などを講義の前半において行っている。

最初の講義において、受講生のアンケートを行い、関心ある専門分野、将来の専門としたい領域を調査している。本年度は、震災における環境の問題、エネルギーの問題も有り、この分野の課題解決において都市環境システムに係わることを認識した意見が多く見られた。最初のレポートでは、環境問題への意見を、グローバルな視点から求めた。

以降の講義では多くの解決しなければならない技術について、事例演習を通して学べるようにした。本講義においては、地球環境から周辺環境、室内環境、環境生理にいたる空間軸を知るとともに、そのための単位系の理解を徹底して学ぶことを大切にしている。また、広範囲の分野に係わる環境工学の知識を受講生が得るために、教科書を採用し、体系化した知識を得て、卒業した後においても学ぶことができるものとした。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

講義の教室のOA化機能を活用し、教科書の解説、映像による事例に建築物の紹介などをパワーポイントによる講義とともに行った。その結果、講義内容についての理解のし易さなどの7項目において平均して4.5点以上と評価されたものと思われる。また、自習を行った時間については、十分な時間をかけられていないのが残念であった。一方、コメントにおいて、都市環境システム学科は4つの専門領域に分かれていることについて、これら専門領域を横断する講義を希望するものがあつた。今後は、社会のニーズの視点から環境統合的な講義の必要性を感じた。本講座の役割の大切さを改めて意識させられた。

3. 今後の授業改善について

講義を通した、コミュニケーションの必要性を感じている。本年度は最初に行った課題と概ね同じ課題のレポートを講義の後半に求め、受講生の講義を通してのスキルの成長を評価した。最終講義時に、3名の方にレポートで意見した内容について、簡単にプレゼンをしていただいた。講義後の質問を本年度は毎回いただいた。しかし、これらについて、講義後においては時間が十分確保できず、十分な対応が出来なかった。これに対応するためには、講義内容の時間割の合理化を行い、コミュニケーションに少しでも時間を多く割くようにしていく必要がある。また配布資料のデータ登録が講義時の当日であったことについて、受講生から意見をいただいた。今後は、1週間前には翌週の講義の配布データを登録できるように調整をしていきたい。

吉村 博幸 Hiroyuki Yoshimura

都市情報工学教育研究領域・准教授

通信工学概論Ⅱ（選必）、6セメ、金3、金6、受講登録数30名

都市環境情報演習Ⅰ（選必）、5セメ、木4、5、受講登録数26名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

通信工学概論Ⅱについて述べる。本授業科目は、旧カリキュラムにおいて開講していた通信環境システムⅡの継続科目であり、電磁気学や回路理論ばかりでなく、複素関数、ベクトル解析、微分方程式などの数学の基礎知識をベースとし、情報通信伝送線路のひとつであるマイクロ波伝送線路の基礎について理解することが目的である。また、昨年度より名称も変わり新カリキュラム科目となったため、これまでの有線通信の基礎だけにとどまらず、無線通信の基礎であるアンテナおよび電波伝送公式、ならびに情報セキュリティの概要および各種暗号方式の内容も取り入れている。

さて、本授業では授業ガイダンス時にアンケートを行い、どれぐらい基礎に立ち戻って説明しなければならないのかを把握した上で授業を行っている。また、授業の初めには必ず、前回までにどのようなことを学んできたのかを概説している。これは、今回の授業で学ぶ内容の位置づけをはっきりさせるばかりでなく、前回の授業をやむなく休んでしまった学生への補講的意味合いもかねている。また、テストは2回行い、レポートを課している。特に1回目のテストについては、採点した結果を授業中に返却し、丁寧に解説を行っている。

なお、過去にしばしば見られた「全体的にわかりづらかった」というコメントを踏まえ、授業の要点をまとめたプリントを配布し、その補足説明を黒板に板書するスタイルに変更しており、今年度もそのスタイルを踏襲した。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

今回の結果のうち、いくつかを以下に示す。

Q9 例題，例え話やサンプル等がわかりやすかったですか？ 4.3（学科平均値 4.3）

Q10 授業では宿題，レポート等が理解を助けるのに役立ちましたか？ 4.4（学科平均値 4.1）

以上の結果より、授業の要点をまとめたプリントの配布、レポート課題、および授業内容に身近なサンプルを加えるよう改善してきた効果が表れてきているように思う。また、

Q15 この授業内容をよく理解できましたか？ 3.8（昨年度 3.3、学科平均値 3.8）

Q16 全体を通して、この授業に満足しましたか？ 4.2（昨年度 4.0、学科平均値 4.2）

であり、理解度および満足度が昨年度より高く、上述した改善効果が表れてきているように思う。

3. 今後の授業改善について

発声、板書については生徒がより聞きやすく、より見やすいものに改善していきたい。また昨年度の大震災では、現在の情報通信システムはまだまだ脆弱であるとともに、情報通信システムの重要性を強く再認識させられた。そのため、都市における様々な課題に取り組む上で情報系の学習の重要性を根気強く説くとともに、都市における身近な事例を多く取り入れて授業内容に興味を持たせ、学生自ら進んで学習させるように引き続き心がけたい。

須貝 康雄 Yasuo Sugai

都市環境システムコース・都市情報工学教育研究領域・教授

ネットワーク基礎 (選必) 3セメ、月2、7、受講登録数 68名

数理計画法 (選必) 5セメ、水6、受講登録数 35名

都市環境情報演習 I (選必) 「複数」、5セメ、木4、5 受講登録数 26名

都市環境システムセミナー (必) 「全教員」、1セメ、金4、火7、受講登録数 90名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

一般学生と社会人学生用に2コマ開講している「ネットワーク基礎」について述べる。「ネットワーク基礎」では板書の講義をしている。内容はグラフ理論の基礎である。学生が手を動かして理解することが重要であると考えている。手書きにより手と脳を連動させて、用語の意味や定理などの導出過程を理解することと、教員が間違えた説明や板書の箇所を見つけさせることが目的である。印刷物や黒板に書かれた内容はすべて正しいという認識を捨てさせ、自分で納得した上で理解する習慣を身に付けさせるためである。そして、教員がどのような思考過程で間違い訂正するのかを観察することは貴重な機会である。このような機会は完成された印刷物やPCを利用した学習では決して得られない講義の本質とでも言うべき機会である。

この科目は選択必修科目であるが、情報、システム、コンピュータを始めとして、非常に広い範囲で基礎となる科目であるため、情報・システム関連に興味がある学生だけでなく、すべての学生に履修してほしい科目である。そのため、限られた授業時間では、本来必要な内容の相当部分を切捨て、単位取得後に学生が自分でグラフ理論を勉強できるように、最低限必要な用語の説明と理解しやすい基本的な考え方を、なるべく多くの例題を取り入れながら講義している。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

各設問に対する結果をまとめると以下ようになる。

(1) 授業全般に関する設問(3~8) : 数値が出ている設問 3,5,7 すべてにおいて 4.6~4.7 であり、全体の平均値を上回る数値になっている。教室の環境について指摘された中で(設問 8)で多かったのは温熱環境の不满であった。それ以外については、日頃、大きい声で説明する(設問 3)、見やすく大きな文字を板書する(設問 5)ことを心掛けていることがこの数値に結び付いたと考えられる。

(2) 講義内容に関する設問(9~11) : 3つの設問について、例題などのわかりやすさ(設問 9)は 4.5 (平均 4.3)、宿題等が役立ったか(設問 10)は 4.2 (平均 4.1)、進度の適切さ(設問 11)は 4.6 (平均 4.2)であり、4.2~4.6 の数値は平均以上の評価であった。期末試験受験者数に対する単位取得率は 88%であった。

(3) 学生自身に関する設問(設問 12~16) : 前半の設問 12(出席)、設問 13(自己学習)、設問 14(質問)は平均よりやや低く、後半の設問 15(理解度)は 4.2 (平均 3.8)、設問 16(満足度)は 4.3 (平均 4.1)であり、平均以上の評価であった。以上のことから、継続的な授業の改善が高い満足度・理解度、及び、高い単位取得率に結びついたと考えられる。

3. 今後の授業改善について

今年度も、「例題が多く理解しやすかった」、「説明がわかりやすかった」「授業は面白かった」等の評価を受けている。今後も例題を多く取り入れた、わかりやすい講義を心掛けたい。

ジャック リーバー Jack Leaver

都市環境システム学科・非常勤講師

専門英語 A 、 13 名

専門英語 B 、 6 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

The unique characteristics of this years class was that the presentations and discussions for the Class A for the first two thirds of the class revolved around environmental issues while the remainder of the class dealt with the issue of creativity from a general perspective as well as related to architecture. In the class B the primary discussion revolved around architecture with an introduction to the thinking of the Western architect Louis Kahn and the Japanese architect Kikoo Mozuna as special topics of discussion. Again this year, there were special presentations on Mozuna's architecture and Mandalas in Mozuna's architecture.

The structure of the class is as follows: a) From a reading prepared for each class the students are to prepare for class by reading this handout about an issue of environment, architecture or creativity and make a list of questions or ideas about the reading. b) In class an initial reading of the same material is done with each student having the chance to read aloud. c) Then a discussion about the various questions or views of the students on this topic is held. Some questions involve the use of English and these provide a basis for further explanation of various topics related to English, culture, architecture and creativity. This serves as an opportunity for students to express themselves in English.

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

3. 今後の授業改善について

This year the class A had a lively discussion about two different environmental topics. This discussion was a limited debate. Unfortunately this only happen twice. If this type of technique were applied to other discussion topics it would make for a lively and engaging learning environment. Additionally there were several brainstorming sessions with the focus of discussion about disaster housing and for next year this should be changed to the issue of energy.

柘植 喜治 Kiharu Tsuge

都市環境システム学科・都市空間計画領域・都市空間設計教育研究分野・教授

都市環境基礎演習 I (必修) 3セメ、木3、4、40名

都市環境プロデュース I (選必) 3セメ、水6、38名 Bコース4名

都市空間計画 (選択) 6セメ、金6、Aコース15名

都市建築デザイン (選択) 6セメ、金6、Bコース2名

都市空間工学演習 II (選必) 6セメ、土3、社会人9名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

本年度は震災関連の調査および震災復興関連の提言に関する活動が多く講義や演習にも大きな影響を及ぼした。本来都市環境システム学科の計画領域が極めて実践的な領域であるために、都市開発に関する実践的なプロジェクト事例を使うことを重視しているが、今年にはこれに震災や復興の視点を加味した。またフィールドに於いて地元開発者、行政、計画者との接点をつくり、学生達の実践的な体験を重視した。被災地との連絡や社会人学生のニーズや、講義時間外に対応するために、ネットワークを活用して授業資料や参考画像をHPに掲載し、ブログ等ネットを活用したディスカッションなど多角的な授業の組み立てと取り組みを展開、学生自らこうしたページを立ち上げ情報交換に役立てた。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

演習講義共に、画像や動画により都市空間を判りやすく見せたことや、被災地を含むアップデートな資料が豊富であったことが好評であった。また他大学との協同や地域連携など学外との関わりが良かった点として挙げられている。都市デザインのプロである社会人学生に対しては、実際のデザイン、プロデュース分野の先端事例を紹介するだけでなく、それらの設計図書を示して、高度な設計手法を教えた。また対外的な評価を得るために学外展覧会や設計競技への参加など学外に対する活動も試み学生達は幅広い見方を学んだ。都市環境基礎演習 I では幕張をフィールドに将来の夢を空間として表現する大型都市模型(約 5000×15000)を制作、工学部祭や都内で開催した都市環展で発表、多くの人から様々な意見を頂き学習成果を実感した。都市環境プロデュース I および都市空間計画および都市建築デザインでは講義を踏まえて実際の提案をさせるために商業技術者団体連合会主催の設計競技に参加、受講生のなかから最優秀賞ほか受賞者を多く出した。また関連のシンポジウムに参加して励みになった。

3. 今後の授業改善について

震災や計画停電等変則的な時間割に流動的に対応したが、次年度も震災復興に向けた実践的な計画を重視した授業とするため、都市環境の諸相全般にわたりプロデュースの視点から幅広く捉えることを授業改善の目標として継続する。空間デザインや建築計画、都市計画の講義および演習にとどまらず、都市文化や産業政策など社会学的アプローチ、事業計画や不動産など経営学的なアプローチなど、プロデュース分野がカバーする領域を広く教育する。教材としてグーグルアースやストリートビューによる視覚的空間情報やU-Tube などリアルタイムな教材を活用していく。加えてツイッターやブログなど双方向でリアルタイムなコミュニケーション手段を導入、より多角的な授業展開を検討していきたい。

図学演習 (A コース) : Descriptive Geometry

(選択必修)、2セメ、火2、受講登録数 54名

郭 東潤・都市空間計画教育研究領域・都市計画研究分野・助教
青木豊実・非常勤講師

1. 授業の組み立て方と取り組み方

この演習科目は、都市・建築の設計や空間デザインなどの高度な設計や製図につながるように、わかりやすく、基礎力を養うことを心がけて取り組んでいる。そして都市的空間・建築的空間を把握し、操作、表現する能力を涵養し、デザインの思考展開および伝達手段として必要な三次元空間表示のため、基礎的図法の理論的な学習とトレーニングを行うことを主眼として組み立てている。

この授業には、都市・建築的な思考について初めて経験する受講生が多数占めていることから、内容的に初心者にもわかるように、製図用具の使い方の説明からはじめて、平面図形の描き方や正投影の描き方などの基礎編からその応用編までを解説し、毎回のトレーニングを通して理解を深めていくと共に、建築図面の作図や、模型の制作を通して実際の空間デザインに触れることができるように配慮している。

授業の工夫としては、よりわかりやすく空間認知力を培養するために、毎回教科書と別途に説明資料や模型などの見本を用意し、解説後にすぐ演習を始めて、その場で質疑を受け、理解度向上を図っている。また、空間力だけではなく、表現力も養うために一定のスケッチ演習(課題として提出)も平行して行っている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

全設問19項目(演習項目)のうち、4項目が平均値と比べ、0.5p以上、下回る評価を得た。下回った設問項目について考察してみたい。

Q3、「教員の声はよく聞こえましたか?」については3.6(平均値4.5)、Q5、「板書、OHP、スライドなどは、見やすかったですか?」については3.0(平均値4.2)、Q7、「教室の環境は満足できるものですか?」については、3.3(平均値4.5)、Q11、「授業内容の量を考慮すると、進度は適切でしたか?」については、3.6(平均値4.2)との結果を得た。この図学演習は、多学年が共同で利用する製図室で行われていることから、マイクやプロジェクターなどが利用できない制約があり、説明が伝わりにくいことがあったと思われる。これは、学生だけではなく教員側も授業中に感じており、次年度の授業にはこの問題を改善したい。また、この演習は短時間のなかで説明と作図を併行しなければならぬこともあり、説明はできるだけ簡潔にし、多くは演習中の質疑等の対応としたが、学生によっては理解が不十分なケースがあったと思われる。説明に要する時間と演習の時間との配分、内容や進度については柔軟に進めていきたい。

3. 今後の授業改善について

演習の成果を見ても、学生の中に、理解の深さ、製図表現力による差が見られた。演習の成果物の講評の時間を設けるなどして、演習の目的、課題についての理解を深めていく必要がある。また、建築の専門的な設計、製図の基礎を学習する時間を設けることも検討している。図学、製図の基礎を身につけるといふ観点に立ち、学生がよりわかりやすく理解できる教材を活用した授業の組み立てや説明、進度について考えていきたい。

削除 4 9

削除 をしっかりとという姿勢…だ…
た [1]

削除 特に…もまったくの…と、…を
両立するとともに…充実な説明と積
み重ね式…を通して取り組んだ [2]

削除 授業に取り組んだ…た [3]

削除 26…記述式の設問27, 28は除く
6項目…大きく [4]

削除
3…「教員の声はよく聞こえました
か?」については3.80であり、平均値
(4.6)に比べ大きく下回った。Q5.
対して…5…4…の結果を得た。この結
果は、…の項目にも反映され…1…3
とあらわれた…た…Q17. 「TA(ティ
ーチングアシスタント)がいた場合、
この演習・実験・実習科目の理解に役
立つように人数が確保されていまし
たか?」の項目については3.7であり、
平均値4.1に比べ低い評価を得た。こ
の演習では約50名の受講生に対し、
一人のTAが担当されている。担当教員
2名を含め、徹底的な指導を行ってい
ると自負しているが、学生側はより親
密かつ徹底的な指導を望んでいると
考えられる。受講生数によってTA学生
が柔軟に確保できるよう学科及び大
学側に要請したい。Q11. 「授業内容の
量を考慮すると、進度は適切でした
か?」、Q19. 「演習は対応する講義の
進度と適切に連動していましたか?」
は、各々3.9(平均値4.2)と3.9(平
均値4.2)の結果を得た。…より本実 [5]

削除 この評価結果は、現在の授業の
やり方について重要な課題を把握す
ることができた…今後、…柔軟な対応
ができる学習方法と、…たい [6]

ページ 1: [1] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:54:00
をしっかりという姿勢		
ページ 1: [1] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:54:00
だ		
ページ 1: [1] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:55:00
た		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:55:00
特に		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:55:00
もまったくの		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:56:00
と、		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:57:00
を両立するとともに		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 19:58:00
充実な説明と積み重ね式		
ページ 1: [2] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:03:00
を通して取り組んだ		
ページ 1: [3] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:08:00
授業に取り組んだ		
ページ 1: [3] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:10:00
た		
ページ 1: [4] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:10:00

ページ 1: [4] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:11:00
記述式の設定問27, 28は除く		
ページ 1: [4] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:12:00
6項目		
ページ 1: [4] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:24:00
大きく		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2012/03/20 13:17:00
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2011/03/16 14:43:00
3		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2011/03/16 14:44:00
「教員の声はよく聞こえましたか？」については3.80であり、平均値（4.6）に比べ大きく下回った。Q5.		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:16:00
対して		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:13:00
5		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2012/03/20 13:18:00
4		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:17:00
の結果を得た。この結果は、		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:18:00
の項目にも反映され		

ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:13:00
1		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:13:00
3		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:18:00
とあらわれた		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:27:00
った		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:23:00
<p>Q17. 「TA(ティーチングアシスタント) がいた場合, この演習・実験・実習科目の理解に役立つように人数が確保されていましたか?」の項目については3.7であり、平均値4.1に比べ低い評価を得た。この演習では約50名の受講生に対し、一人のTAが担当されている。担当教員2名を含め、徹底的な指導を行っていると自負しているが、学生側はより親密かつ徹底的な指導を望んでいると考えられる。受講生数によってTA学生が柔軟に確保できるよう学科及び大学側に要請したい。Q11. 「授業内容の量を考慮すると、進度は適切でしたか?」、Q19. 「演習は対応する講義の進度と適切に連動していましたか?」は、各々3.9 (平均値4.2) と3.9 (平均値4.2) の結果を得た。</p>		
ページ 1: [5] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:29:00
より充実に取り組んできたが		
ページ 1: [6] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:33:00
この評価結果は、現在の授業のやり方について重要な課題を把握することができた		
ページ 1: [6] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:37:00
今後、		
ページ 1: [6] 削除	青木 豊実	2010/03/15 20:35:00
柔軟な対応ができる学習方法と、		

たい

中谷 正人 ・ Masato Nakatan

建築計画Ⅱ (選必)、5 SEM、金、3、受講登録数 31 名

1. 授業の組み立て方と取り組み方

この授業は、建築を計画する上で必要な知識及び考え方を習得することを目的として全体を構成している。建築の現実の問題としては、それぞれの建築には使用用途があり、それを機能的に満足することが求められているが、使用用途は設備の老朽化、用途変更、規模の拡大縮小など、時間の経過とともに変化していくものである。したがって目先の用途は機能を満足するだけではなく、社会の変化にも対応出来る建築が計画されなければならない。

このような視点より、既存の 20 世紀の現代建築を例として、それぞれの建築とが果たしてきた社会的役割、現実の機能、対応性そしてそれを計画した建築家等に焦点を当てながら、建築計画の在り方を理解できるように授業を組み立てている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

基本的にはすべての項目において平均以上の回答が得られているので、ある程度の効果は上がっているかと思われる。

しかし、問4および6、8に対する回答がないことに対して説明を加える。まず、問4は問3に関する補足的なもので、教員の声が聞こえない、あるいは聞きにくい理由を問うものであるが、私はマイクを使用していないので、「b」という回答は理解に苦しむ。ただしbは音質が悪いという指摘であるから、私の声が悪いということであれば、のど飴でも舐めながら授業する他はない。乞参考意見。

問6も問5に関する補足質問だが、OHP の文字や図が見にくい(b)、暗い(c)という指摘である。いずれも OHP の性能に帰すべきものかもしれない(私の資料は手書きではなく見やすいフォントを選んでいるつもりである。さらに OHP ではなく PPT を使用している)が、座席には余裕がある状態なので、各自が適宜選択すればよいことであるかと考える。あるいは巨大な液晶モニターを装備するか?(これは本気ではない)

問8も補足質問だが、温熱環境に不満(a)、手元が暗い(b)、空気が悪い(e)の回答がある。OHP を使う以上、暗くなること、カーテンを閉めるため空気が悪くなるのは止むを得ないことかと考える。陽気のいい時は窓を置きたいのだが、風があるとルーバーがガチャガチャとうるさい。どちらをとるかの選択になるが、どうしたものか。温熱環境に関しては窓際と壁際の温度差があるが、どう対処したらいいか、ぜひご教示願いたい。

問9～11にかけての回答において評価が高かったことはありがたいことである。

3. 今後の授業改善について

授業においてはヴィジュアルを掲示しながら説明しているが、さらに、個々に建築計画における考察力や洞察力を涵養するため、今回はディベート形式のディスカッションを試みた。結果としては、講義のときには見られなかった積極性が多くの学生に感じられたため、これからも積極的にディベートを授業に組み込むことを考えている。

森永 良丙 Ryohei Morinaga

都市環境システム学科・都市空間計画領域・准教授

都市居住計画（選択必修）4セメ、月6、受講登録数63名

都市環境基礎演習Ⅱ（必修）4セメ、木3・4、受講登録数62名

1. 授業の組み立て方と取り組み方

講義に関しては、居住にまつわる現代的課題に対して、構想力をもって対峙できる基礎的知識と問題意識を得ることを目指し、講義毎に主題に対するキーワードを絞り、授業時間の前半は板書による主題の解説、後半は都市居住やまちづくりの先進事例の画像等を見せるといった構成を基本としている。また、可能な限り対話をする時間をつくり、授業中に一般教養的な内容等についてこちらから質問し、また、受講者からも質問できる時間をとっている。

演習に関しては、都市を構成する物理的・人間的要素と諸問題を実際にまちに出向いて解説し、よりよい都市にするために構想・計画し、提案をまとめてプレゼンテーションするという基礎的能力を育てることを目指している。2年前の改訂プログラム実施に伴い、本学科全4領域が2つのプログラムAとBを担い、受講生を2グループに分けて入れ替え制にして両プログラムに臨んでもらった。（即ち同じ課題を前半と後半に2回実施した。）筆者はプログラムA（都市住宅設計）を担当した。毎回多くの課題提出を求め、非常勤講師2名と共にエスキス、質疑応答、ディスカッション、アドバイスを重ねながら進めた。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

上記の講義系である「都市居住計画」の授業では、授業評価アンケートの総合的評価の項目である「理解」「満足」など授業全般に関しては、比較的高いポイントの回答を得ている。主に毎年度評価されている項目は、内容の理解への工夫や具体的な事例等の提示に関するものであり、毎年、講義内容の改訂を行っているが、引き続き検討していく予定である。

演習系である「都市環境基礎演習Ⅱ」に関しては、先に述べたとおり改訂プログラム実施3年目だが、少しずつ評価も向上しているようである。学生の専門的な志向性と興味によって、取り組み方の温度差はあるが、2つのグループに分けて比較的少人数にした上で、多領域の課題を指導した結果だと考えられる。一方で、住宅設計課題をこなす時間が足りないと予想される評価数値が出ている。

3. 今後の授業改善について

数年来検討してきた授業内容および進め方の改善の成果が、年を経るごとに出てきたように思われる。本年度の反省のうえで、特に演習に関しては、適度な進度で全受講生がより興味を持つような内容へ改善する必要がある。

本学科が持つ学生の多様性に対応できるように段階的に改善を図りつつ、さらに個々の学生が主体的に授業に臨めるように、求められる専門性と照らし合わせながら、授業内容とプログラムの充実を目指したい。

関口 徹 Toru Sekiguchi

構造力学演習 I (選)、3セメ、火5、受講登録数 56 名

都市環境基礎演習 I (必)、3セメ、木3, 4、受講登録数 57 名

都市空間工学演習 I (必)、3セメ、木3, 4、受講登録数 9 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

担当している構造力学演習 I は、構造力学 I の講義で学習した内容について演習を行うものである。そのため構造力学 I の講義の次に行っている。前半にその日の講義の内容に沿った問題を学生に演習として解かせている。講義の内容について実際に手を動かして計算を行い理解することを目的とし、演習の解答について成績はつけない。そのため、解答中は質問を随時受け付け、学生同士の話し合いも許可している。後半には問題の解答をプリントで配り、黒板に板書をしながら解説している。内容は一級建築士の学科試験で例年計算問題として出題されてきた範囲であるため、演習問題の約 4 つの大問の内、1, 2 問程度建築士試験の過去問を取り上げている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

演習として重点を置いていたものとして、教材 (設問 2、平均 4.7)、声 (設問 3、平均 4.7)、板書 (設問 5、平均 4.8)、講義との連動 (設問 19、平均 4.8) などはおおむね高い評価であった。しかし対応する講義の理解 (設問 18、平均 4.0)、質問をしたか (設問 14、平均 3.0) については平均が低かった。できるだけ多くの学生に理解してもらえるようにしたい。質問については例年のことであるが、演習であるため質問のしやすい環境作りを常に心掛けたい。満足 (設問 16、平均 4.6) が比較的高かったのがよかった。

アンケートの回答数が 49 と 9 割近くあるので、これからも多くの学生に回答してもらえるように気をつけたい。

3. 今後の授業改善について

担当が 5 年目となり、演習問題の難易度や分量についてはかなり洗練されてきていると考えられるが、より多くの学生が理解しやすくなるよう要点を押さえ、興味を持てる内容となるようさらに改善していきたい。建築士の資格取得を考えている学生が構造力学の問題に苦手意識を感じないようにできたらと思う。

中込 秀樹 Hideki Nakagome

都市環境工学教育研究領域・環境エネルギー研究分野・教授

環境エネルギー工学 Aコース (選必)、4セメ、金3、受講登録数45名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

都市環境基盤工学は廃棄物、リサイクル、エネルギー問題などの環境に関わる基本事項を勉強することを目的としている。環境工学は多くの学問領域からなりたっており、基礎学問を積み上げていくには学ぶべきものが多すぎると思われる。従って学部二年というまだ若い学生たちを対象に、世の中で現実に問題となっている事柄を見せることにより、興味のあるジャンルや事象をまず選んでもらうことが講義の狙いである。その上で、その中の技術課題を解決するための基礎学問を会得してもらうことを望んでいる。従って、講義では折に触れて技術の最先端領域にて実際に活躍している方々にも来て頂いて話をしてもらう機会を作っている。それでも一回 90 分×半年分の講義の中で伝えられることが少ないことが大きな悩みである。メディアプランニング演習 I では、このような地球環境やエネルギー問題の中から興味のある課題を選んで、半年間に渡って勉強することが主目的である。全ての講義、演習においては、できるだけ学生達にも授業に主体的に参加してもらうことを行っている。とはいっても基礎知識の無い状態から始めるので、最初はテキストを声を出して読むことからスタートするが、最後のほうではかなり積極的に意見を述べたり、議論を戦わせたりすることができるようになる。また最初は声も小さかったり、下を向いていたりする者が多かったが、授業が進むに連れて大きな声ではっきりと発言できるようになっていく。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

受講生からのコメントとしては、配布資料の全部を教えることができなかったが、「他の部分を家で読むのが面白かった」ということにて配布した甲斐があった。また「参加型の授業でよかった」ということに対して、「指名するのでは無く、手を上げて答えたいこともあるので、そういう機会を設けて欲しい」との意見もあった。外部からの講師の話は概ね好評であり、「現場の生の話が聞けてよかった」、「実際のプラントに是非見学に行ってみたい」などがあった。またある学生は講義で紹介した北海道のプラントに実際に見学に行ってきたので、見学記を授業の中で紹介してもらった。一方、途中退席してしまう学生もいたように、最初のみでなく講義終了時にも出席を取り直したり、毎回簡単なレポート等を出してもらったほうが良いかもしれない。また指されることで緊張感が持続できたとの意見もあった。

3. 今後の授業改善について

以上を踏まえて、さらに学生たちに興味が持てる授業へと発展させることと、毎回小レポートを行う等のきめ細かな対応を行って、より緊張感と理解度を深めていきたい。本当は後半の授業では、小グループに分けて議論を行うなどをやりたいのだが、受講生が多いのでままならない面がある。また半年の講義時間内でやれることの少なさは大きな悩みである。学生たちも多くの授業を抱えて忙しいとは思いますが、プロジェクト研究のように各人何かテーマを決めて半年間に渡っていろいろ調べることができると、より理解が深まるであろう。また今後の基礎学問の習得も忘れないように願いたい。

都市空間工学演習 1 (計画系) : Environment Planning Practice 1

(選必)、5セメ、土3～4、受講登録数15名

北原理雄・都市空間計画教育研究領域・都市計画研究分野・教授

中谷正人・都市建築計画教育研究領域・都市建築計画研究分野・客員教授

郭 東潤・都市空間計画教育研究領域・都市計画研究分野・助教

1. 授業の組み立て方と取り組み方

この演習科目は、一定規模の建築・都市のデザインについて構想、企画し、計画を定め、総合的にまとめあげるトレーニングを行うことを主眼として組み立てている。さらに、地域社会や住環境の課題を学生に与えることにより、現実の都市環境に対する読み解き方や具体的な方案を探ることも目的として行われている。そのため、予め地元住民や行政の理解を得て、受講生同士でチームを組み、地元住民の意見や現地調査、討議を重ねながら行われた。

この授業には、大きく2つの工夫を授業に取り入れた。一つ目は、4～5人のグループ提案と個人提案の両立である。異なる経験や考え方をを持ったメンバー達が共通の問題意識を組み立て、グループとして解決案を構想し、さらに個人的提案にグループ構想を反映することで、総合性かつコミュニケーション力の培養を期待した。二つ目は、現場中心の授業特徴を活かし、地域住民との意見交換を授業に取り入れた。学生の創意的提案に対し、生活側面からの現実的なコメントを得ることにより、地域社会や住み手の問題を理解させることであった。意見交換2回(地元住民や関係者による現状説明、地元住民への提案発表)、グループ発表と個人提案発表を通して、より都市環境の問題を読み解くことが把握できると考えた。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

全設問26項目(記述式の設問27,28は除く)のうち、26項目すべてが学科全体の平均値と比べ、高い値を得た。

まず、授業内容に関する評価項目である Q15.「この授業内容をよく理解できましたか?」は4.6であり、学科平均値3.5と比べ、高く評価された。また、Q16.「全体を通して、この授業に満足しましたか?」は、4.7(学科平均値4.1)、Q18.「あなたはこの演習・実験・実習科目を受講することによって、対応する講義の理解が深まりましたか?」は4.8(学科平均値4.3)が得られた。

この結果は、授業に取り組む高い出席率と時間に起因すると考えられる。Q12.「あなたはこの授業にどの程度出席しましたか?」に対し、全員が「全回」または「4/5程度」と回答しており、また、Q13.「あなたは毎回の授業の準備学習・復習に平均してどの程度の時間をかけましたか?」は9割以上が「4時間以上」と回答した。これは各々の学科平均値4.6と1.9と比べ、非常に高い数値である。これはグループや個人提案発表による深度あるディスカッション、さらに地元の意見交換などを取り入れた授業の組み立てが授業内容の理解力の向上に繋がったと判断できる。

3. 今後の授業改善について

この評価結果は、一定の成果をあげたことを示していることから、当面、現在の授業の進み方を継続していきたい。一方で、今後も社会人も含め、受講生に対する柔軟な対応ができる学習方法を考えたい。

石井邦彦 Kunihiko Ishii

都市建築法規・行政、後期 Semester、月 6、受講登録数 38 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

受講生は、建築関連法規を初めて学ぶ学生から実社会で建築を仕事としている社会人まで幅広い構成になっている。そこで、授業レベルは平易でも、難解でもないことが要求されてくる。講義資料も、基本事項を平易に解説しているものから、熟達者にも興味を示してもらえそうな実務的で最新の事例を幅広く提供していくことに努めている。

授業の組み立て方としては、まずわが国の建築活動（計画・設計・施工等）が法律を規範として営まれていることについて理解してもらい、次に「法律を読み解き守ること」から「各種の制度を活用して建築物やまちづくりまで誘導していくことができること」まで幅広い視点を養ってもらうことを目指している。

具体的な進め方としては、建築関連法規の用語や制度の解説を行うとともに、学生自らが実際の法（条）文でも読み解けるよう具体的な法文を交えながらの授業を行っている。用語や制度の解説では、OHPを活用したり、具体事例などを織り込んだりしている。さらに、少々複雑で専門的と思われる事項や行政実務などについても、実務の一片を体験してもらうことになると考え紹介に努めている。

また、世の中の技術水準が高度・複雑になっている現在、国家試験レベルの技術資格を取得しているかどうか、その技術者のスキルの目安になるという時代が身近なものとなってきている。そこで、建築士資格は身近で基本的な資格であることから、この技術資格を取得しておくこと（取得しようとチャレンジしておくこと）が大切であると考えている。授業では、重要事項をゴシック体で強調したり、下線を引いたりした講義メモ（資料）を毎回配布して解説しており、毎回のテキストであるとともに後日読み返して自主確認ができるよう配慮している。また、出欠表に問題を載せることによりその日の講義内容を復習させている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

相対的にほぼ平均点並みの評価を受けており、概ね良好と評価されていると判断している。しかしながら、講義内容そのものが法律であり、普段学生になじみがないもので、理解度がやや低かったのて来年度はもう少しわかりやすくするように努めたい。

教室が広いためか、スクリーンに映写した解説図が見にくかったとの評価もあることから、さらに見やすい解説図を用意するなどの改善に努めたい。また、講義内容が多いので、早口となってしまう、聞きづらいと評価もあったので、改善に努めたい。

なお、受講者の理解度を客観的に把握する目的で、中間試験及び期末試験では一級建築士試験の過去問題（基本問題を抽出したもの）を課しているが、受講生の平均点が比較的高得点であったことから、一定の理解が得られているものと考えている。

3. 今後の授業改善について

建築関連法規の内容は膨大であるため、つい一方的な説明に終始してしまうことが反省点としてあげられる。今後は講義中に演習を行うか宿題を課することにより、学生に参加してもらえような授業形態に改善していく必要があると考えている。また、テキストに図が少なかったため、来年度は図が多く載っているものに代えて、学生が理解しやすいようにしたい。

北原 理雄 Toshio Kitahara

都市環境デザイン (選必)、4セメ、水6、受講登録数 51 名

都市環境デザイン (選必) B コース過年度生用、6セメ、水6、受講登録数 3 名

都市空間工学演習 I (選必)、5セメ、土3・4、受講登録数 15 名

1. 私の授業の組み立て方と取り組み方

ここでは講義科目「都市環境デザイン」について述べる。

「都市環境デザイン」の目的は、人びとの生活の場である都市環境を的確に読み解き、そのあるべき姿を構想する力を身につけてもらうことである。特に、都市における「人 ≡ 生活 ≡ 空間」の関係、また都市空間における「部分 ≡ 全体」の関係を理解する力を培うことを重視した。このため、講義では過去～現在の具体的な事例を示して理解を促し、さらに簡単な実習によって「身体」で空間を把握することの大切さを感じてもらい、レポート課題によって「現場」で知識を検証する機会を設けた。

授業は、「住居 ≡ 街」「場所 ≡ 生活」「都市 ≡ 場所」「計画のパラダイム」と進む講義を主軸に、それを上述の実習とレポート課題、さらに事例研究で補強する組み立てをとっている。各回の授業では、最初にテーマを簡潔に提示した後、事例を用いたテーマ展開を板書し、学生にノートをとってもらい、さらにスライドを使って事例の図面や写真を示して理解を深める工夫をしている。また、毎回、紹介する事例の図・写真を印刷資料として配付し、質問欄・意見欄を設けた質疑票を毎回提出してもらい、そこで出た質問・意見に次回授業の冒頭で回答するように心掛けている。

2. 学生による授業評価結果、ならびにそれに対するコメント

講義科目の設問項目数は 16 であり、そのうち設問 2, 3, 5, 9, 10, 11, 15, 16 が授業内容に対する評価項目である。この 8 項目の平均評価は 4.54 であり、学科平均 (4.21) を 0.33 ポイント上回っている。項目別でも、「板書、OHP、スライドなどは見やすかった」4.8 (学科平均 4.2)、「進度は適切だった」4.8 (4.5)、「例題、例え話やサンプル等がわかりやすかった」4.6 (4.3)、「教材は授業の理解に役立った」4.6 (4.4)、「宿題、レポート等が理解を助けるのに役立った」4.5 (4.1)、「教員の声はよく聞こえた」4.8 (4.5)、「全体を通して授業に満足した」4.4 (4.2)、「授業内容をよく理解できた」4.0 (3.8) と全項目が学科平均を上回った。自由記述でも「解説が論理的でわかりやすく、説得力を感じた」との感想があった。授業満足度、教材の効果、例え話等のわかりやすさなど、昨年度評価の低かった項目を改善するため、教材を見直し、事例を厳選して、分かりやすい説明を心がけた授業が今回の評価に結びついたものと思われる。

3. 今後の授業改善について

私の授業では期末試験を行わず、授業の進行に合わせて 3 回のレポート課題を課し、その成果を発表してもらい、実地観察を通じて講義内容の理解を促すとともに、学生どうしの啓発を量っている。アンケートの自由記述では「課題は大変でしたが、自分の力になった」「他の人の発表を聞くことで、さまざまなアイデアを得ることができた」「課題のタイミングが絶妙だった」などの感想が寄せられた。今後はこの方針をさらに充実させ、学生の特性とニーズを的確に把握し、積極的に学びの動機づけをはかっていきたい。